

研究ノート

蔚山大学校語学研修プログラムの課題研究

李 文相*1

キーワード：研修プログラム、学外研修、自由レポート、ホームステイ

1. はじめに (研究目的とねらい)

本年5月7日から7月23日までの約10週間、蔚山大学校人文学部日本語日本学科3年生38名が第1陣と第2陣に分かれて本学で語学研修した。研修生たちは本学のほかに島根県立大学と宮崎公立大学においても同様の研修をした。この語学研修プログラムは、今年1月、本学と「学術交流協定」を結んだ蔚山大学校の要請に応じて実施されたものである。このような研修の受入れは本学では初めての経験でありさまざまな課題が浮かび上がってきた。

蔚山大学校では毎年、日本の複数の大学で語学研修を行っている。研修生たちは基本的には自費で参加しており、彼らは「学内研修」や「学外研修」だけではなく、宿舎や食事、その他生活上のあらゆる点について受入れ大学の対応や研修プログラム全体の評価など本学のものと同大学のものとの比較できる立場にいる。

本研究は、このような語学研修プログラムが蔚山大学校の意向により来年度以降も本学で継続実施される予定であることから、今回の第1回目の研修プログラムを総括し、そこに浮上した課題を整理して次回からの実施プログラムに改善を加えることを目的とする。なお、本学にとっては費用対効果のバランスを考えたプログラムになるよう、主に「学外研修」と「日本語教育」を専門の経験を踏んだ中高齢者を中心とする“ボランティアスタッフ”に業務委託する制度を確立させ、効率的かつ専門性の高い語学研修プログラムを構築することをねらいとする。

研究の方法と参考資料

研修生の「研修発表会(日本語)」や「学外研修レポート(日本語)」、「自由レポート(韓国語)」、本学学生・教職員、ホームステイ先へのアンケート調査等での感想や意見の傾向分析。

期待される成果

蔚山大学校との関係強化、及び萩市民と本学との信頼構築。

大学に対する貢献

国際交流活動の高度化、及び留学生募集の効率化。

2. 語学研修生の日本語能力と講義内容の理解度

蔚山広域市は人口110万人を擁す韓国の一大工業都市である。蔚山広域市と萩市は1968年(昭和43年)に姉妹都市提携の盟約を結んでいる。この縁組は地方都市の発展と日韓の友好親善を目的に両国の行政主導で進められたものであり、日韓間における姉妹都市提携では全国第1号である。2007年(平成19年)には蔚山広域市韓日親善協会の会長ほか24名が萩地区日韓親善協会との交流のために萩市を訪れ、姉妹都市締結40周年記念式が盛大に開催された。

蔚山大学校は“現代グループ”の創業者である故鄭周永氏が1970年に設立した総合大学で、12学部と6大学院、学生数1万4千名を有している。蔚山大学校の現在の総長は金道然氏。蔚山大学校の理事長は“現代重工業”創業者鄭周永氏のご子息で最大株主でもある鄭夢準(政治学博士)氏。人文学部日本語日本学科の学生数は1年生から4年生まで合わせて約200名。学生たちは日本語と日本文化・歴史を専門的に学んでい

*1 山口福祉文化大学 ライフデザイン学部

る。日本における語学研修制度は毎年実施されており、3年生になるとほとんどの学生が日本の複数の大学で約3ヶ月間研修を受ける。研修は正規の授業として扱われ、受講科目は成績により単位取得できるようになっている。

研修生の日本語能力は、優劣の差が大きく一概に評価することは難しいが、ヒアリングとスピーキングについては大学の日本語授業にでも適応できる能力が認められるが、ライティングについては表現力に問題はないが、全般的に助詞の使い方や語尾の言い回しに誤謬が目立つ人が多いようだ。本学での研修授業科目のうち、建築・芸術・音楽・スポーツ文化等の科目では専門用語が解せず、授業中に辞書を引く時間に追われて授業を終える学生が多く見られた。したがって、これらの授業科目では全体的に講義内容の理解度も低かったと言わざるを得ない。

3. 学内研修と学外研修

本学での語学研修期間は第1陣と第2陣に分かれて、5月7日から7月23日までの約10週間である。

研修の受入れにあたっては曜日毎に学内研修と学外研修に分けたプログラムを準備し、研修生には毎日タイムスケジュール通りに行動してもらうことにした。研修生の人数は第1陣が18名、第2陣が20名で合計38名。引率者として蔚山大学院生の女性1名が加わり、第1陣と一緒に派遣された。引率者は第1陣と第2陣の期間を通じて連絡業務を務め、第2陣と一緒に帰国した。

学内研修では、研修生は毎週月・水・木・金曜日にそれぞれ1日2～3コマずつを本学学生と一緒に授業を受けてもらうようにした。ここで問題になったのは、本学の実状からして授業科目が9科目に限定されていたことである。研修生には授業科目を選択する余地が無く、そのため研修生にとっては自分に関心の無い授業に参加させられ貴重な時間を費やしたとの思いを吐露する学生がいたのである。授業科目は「健康とスポ

ーツ・芸術文化論・コミュニケーション形態論・音楽・建築概論・スポーツ文化論・日本語特講・体育実技Ⅰ・基本ゼミⅠ」。

なお、学内研修で次に問題になったのは、一緒に学んでいる本学一部の学生を受講態度と自分たち研修生に対する無関心な態度についてであった。つまり、本学学生たちの受講態度が好ましい状況ではなかったということと、日本の学生たちとのコミュニケーションの機会が少なかったという感想であった。

学外研修では、毎週火曜日に設定されており、週によっては土日も学外に出て地域を見学し体験・講義・市民との交流等によって研修をした。主な行き先や体験の内容は、萩市役所・萩博物館と学芸員の講義・県立萩美術館浦上記念館・椿東小学校・福栄中学校・萩光塩高等学校、浜崎伝統おたから博物館・スイミングスクール・萩焼・萩ガラス工房・柚子屋本店・萩市内及び萩周辺観光・本学野球部と他大学とのリーグ戦観戦・オープンガーデン散策・萩ライオンズクラブとの夕食会・本行寺での茶道体験等である。

なお、学外研修の一環として土日を利用した1泊2日ホームステイが隔週に一回設定され第1陣と第2陣にそれぞれ3回と2回実施された。ホームステイの受入れ家族は萩市報による広報や、萩ライオンズクラブ、(本学を)支援する会、本学教職員による積極的な声掛け等によって必要数を満たすことができた。

学外研修の実施プログラムについては、萩市や各市民団体に協力を要請し、お陰でいろんなメニューが準備できたので何よりだと思っていたが、しかし研修生からは学内の授業科目と同様に、やはり人によっては興味の無いものに無理やり付き合わされたと感じる場合もあったということの後で聞いて対応が難しいことに気付かされた。

4. 地域との交流とホームステイ

外国人と地域との交流促進にはどこの国も一般的にはホームステイが有効だと考えられている。ところが、

日本では特に萩のような地方ではまだ経験が少ないこともあって、ホームステイ受入れ家族の募集には苦心することが多い。その理由としては、外国人をホームステイする場合に“お客様として扱う”という意識が非常に強いために、そのつもりで家庭環境を整えることが煩雑になること、そして、言葉の問題が支障になるという先入観によるものと考えられる。しかし、今回の研修生は蔚山大で日本語を専門に学んでいる大学3年生の若い男女であり、言葉の問題はクリアできたのであるが、人数が一度に18名～20名と多かったことや、ある家庭の場合は直前になって受入れができない事情が突発したこともあって全員を引き合わせるのには難しかった。そんな訳で、1回は一家族に4名の学生をお願いしたこともあった。

ホームステイの実施では、前以って食べ物の好き嫌いやペットに対する考え方などをアンケートに記入させて写真と共に受入れ先に送付し、その上で学生と受入れ家族との対面式を設けた。ホームステイの当日は受入れ先に土曜日の午前10時に宿舍の学生寮まで迎えに来ていただき、翌、日曜日の午後8時までには同学生寮に帰していただくことで各自が個人レベルでホームステイを終了できるようにした。幸いにも重大問題や事故は無く、合計5回のホームステイを無事に終了することができた。

ホームステイにおける学生の感想は、研修生の「語学発表会」や学外研修のレポートなどで語っていると、萩の笠山や日本海の自然風景や菊が浜の夕焼けがすばらしかったと感じたことや、萩城跡、大照院などを見た感想では、萩の小さな町で偉大な歴史を感じることに驚いたことなどが伝えられた。しかし、研修生の何人かはホームステイが一番楽しめたのは萩でのことではなく、広島や福岡に連れて行ってもらった時のことであったのは象徴的である。このことは、萩には若者が目を見張るような都会的センスに欠けることや世界の食や文化を楽しめる場所が無いことに関係しているのではないかと。しかし、萩の自然や地

域の遺産についてはほぼ全員が肯定的な感想を述べており、ホームステイによる自由行動の拡がりの中で萩についても客観的に判断する機会となったのはホームステイの一つの成果であったと考えられる。

5. 研修生の「語学発表会」、「学外研修レポート」、「自由レポート」の傾向分析

研修生には日本語の勉強のためになると思い、学外研修後には日本語によるレポート提出を要求した。学内研修では各授業の担当教員が授業に関するものを任意で、学外研修ではその日の行事に関するものを義務的にレポート提出を課したのである。これに対し、研修生の中には毎回レポートを提出することを嫌がる者が多かった。その理由は、授業を日本語で理解するのに一所懸命な者にとって、日本語でレポートも書くために、時間的な制約の中で考える間、いつの間にか授業の内容を理解することよりその日のレポートをどのように書くかが毎日の悩みであったと言う訳である。このことは学外研修でも似たり寄ったりで、ある人は見学や内容を説明してもらっている途中でもその日のレポートのことが気になってだんだんストレスを感じるようになったと漏らしていた。

ところで、彼らの「語学発表会」や日本語によるレポートではいつも肯定的な意見が表明される場合がほとんどである。それは周りに対する気遣いでもいえるもので、外交辞令的な表現になる傾向が多いのである。それに比べて、韓国語による「自由レポート」を第2陣に研修期間後半の時点で書いてもらったところ、それまでは聞けなかった率直な意見を聞くことができ、否定的な意見が多かった。それは無記名で提出させたからでもある。しかし、否定的な意見は反面、彼らが希望していたことでもあり、次回からの研修プログラムの改善に役立つ貴重な意見である。研修生がそれぞれの「場」でどのような意見を述べていたかを次に示す。一部重複する部分もあるが、傾向を簡潔にまとめた。これらの意見の中にこれからの課題が浮き彫りに

されていると思う。

①「語学発表会(第1陣)」における発言傾向・・・(日本語)

○萩に来て良かった。「山口福祉文化大学」の環境も良かった。

○寄宿舎であった学生寮の設備が大変良い。

○食事が美味しい。

○萩は古い歴史が感じられ、静かでのんびりできるようだ。

○萩には山や海があり自然がすばらしい。特に笠山や日本海の眺望は優れている。

○萩城跡やその他遺蹟の規模が大きいのは驚いた。

○教職員の先生方が一生懸命に世話をしてくれたので感謝している。

○よそとの大学対抗野球観戦ができて良かった。試合に勝つのが観られて大変興奮した。

○学外研修でいろんなところを見学した。萩の特産品の萩焼で自分だけの作品をつくったり、ガラス工房や夏みかんジュースも製造体験できた。どれも初めての経験で楽しい思い出となった。

○ホームステイで初めて日本人の家に泊まり、生活習慣が韓国と似ているものや違いなどを知ることができたのは貴重な体験だった。いろんなところに連れて行ってもらい、お父さんとお母さんが一緒に美味しい食事をつくってくれて有難かった。良い思い出がくれたのでホストファミリーに心から感謝したい。

○小学校や中学校で子供たちと一緒に食事をした。子供が自分たちで食事の用意をするのを初めて見た。また、男の子と女の子と一緒に遊んでいる姿は珍しかった。(韓国の子供たちは男女と一緒に遊ぶことはほとんど無い)

○小学生とドッジボールをしたが体力が想像以上に強く、ボールのスピードが速くて恐ろしかった。

②「学外研修レポート(第1、第2陣)」における記述

傾向・・・(日本語)

○島根、宮崎、そして最後に山口県の萩に来た。各地域に違いはあるが、この大学では毎朝落ち着いた雰囲気ので1日が始まるので良かった。何よりも食事が大変おいしい。

○学生寮は大変良かった。大学の教職員の先生方は一所懸命お世話をしていただき本当に有難かった。ホストファミリーの皆さんとは大変良い時間を過ごすことができ楽しい思い出もつくれた。感謝している。

○チューターと一緒に受ける授業があったが、日本人学生と親しく交流する企画がほとんど無いのは残念だ。

○最初萩に到着して人が少ないので驚いた。

○先にここで2ヶ月間過ごした1陣の研修生チームと比較されるようで嫌だった。

○授業に対して戸惑ってしまう。2ヶ月間、島根や宮崎では私たちのための授業が多く、チューターにも度々会うことができたので交流も多くできた。ところが、ここではそうではなかった。

○私たちが第1陣の研修生たちと比較されるのはわかるが、私たちも島根や宮崎とこの大学とを比較して考えてしまうのも事実だ。

○建築学など、日本語科の私たちに合っていない授業よりもエアロビクスや運動が良いのではと思う。

○ここは日本で3番目の研修先であり、率直なところ私たちが疲れた心持ちになっていたのも事実である。教職員の先生方に迷惑がかかったかと思うと申し訳ない気持ちである。

○他の大学になかったエアロビクスや水泳、音楽などは新鮮でよかった。

○私たちは韓国で日本語の文法と講読を多く学んでいるので、日本では日本の文化や日本語を直接話すことを学べるようにしてほしい。学外研修は興味深かったけれど天気を考慮しないでスケジュール通りに進めたのは遺憾だ。

○よその大学では、チューターが自分で志願した人たちだったから、より積極的に自分たちにかかわって

れた。同年輩の若者同士が日本語で話し、日本文化を学べるのは大変役立つと思う。その点、ここではそうではなかった。

○担当教職員の方々は何事にも一所懸命世話をしてくれたので助けになった。

○3ヶ月間、3つの大学で研修を受けたが、それぞれずいぶん違う感じを受けた。その中でも萩が一番の田舎であるから静かでのんびりと気楽でもあった。ところが、ここでは日本文化の体験学習が多くて良かった反面、パートナーと会話する機会が乏しく一緒に遊んで親しくなるような時間はほとんど無かった。

○体系的な日本語の授業が無かった。

○良い寄宿舎と自転車のレンタルを準備してくれた配慮がとても嬉しかった。

○島根では毎日パートナーと日本語で会話をして発表する機会があった。そして、しばしば日本語文法の時間も設定されていた。宮崎では自分たちで演劇やアンケートの設定形式などで日本語の実践練習をした。ここでも日本語についてそういう工夫をすると良いのでは・・・。

○小学校訪問では、日本の児童を観察でき韓国との比較もできて勉強になった。日本の子供たちは礼儀正しく、また規則正しい。給食の時は子供たちが自分で準備をしていた。テーブルマナーや食べ物に対する感謝の気持ちを持つよう教育されていた。食器の配膳や返却、残飯の処理等がしっかり教育されていたのでとても感心した。

③「自由レポート(第2陣)」における主な意見・・・ 無記名(20名韓国語、10.07.14)

○日本語の練習に来たのに日本語の講座が無いのにはがっかりした。

○授業科目を自分で選択することができず、強制的に参加させられている気分だ。

○建築・芸術・スポーツ文化などは、韓国では教養科目でも受けていない。韓国語でも内容が理解しにくい

のに日本語で聞いてしかも宿題まで出されては頭が破裂する思いだ。

○研修生に合う講座を開設してほしい。ぜひとも。

○宿題があまりにも多い。一日中、びっしり宿題を出され、学外に出ればそこでも毎日レポート・・・、少し減らしてほしい。ある日など、あまりにもやる気を失い溜息が出た。

○島根や宮崎の大学では学生チューターがいつも付いてくれた。この大学では1週間にわずか1回だけなので親しくなる機会が持たず残念。親しくなるには何度も会える状況をつくる必要があるのではないか。

○学生チューターを改善してほしい。(島根大学のよう
に、チューターと一緒に受けられる授業を増やしては
いかがか。)

○山口福祉文化大学では建築やスポーツ理論などがあるがまったく興味が無い。このことは来るまで想像も
つかなかった。講義内容はある程度理解できても専門
用語に難しい単語が多く大変だった。ほとんどの研修
生たちはこのような授業時間は集中力が著しく落ちた
ようだ。

○蔚山で学校に通うときは日本関係の授業には少しの
懐疑感もなく自分の考えで受講してきた。しかし、こ
の大学では島根や宮崎のときに比べても、それ以上わ
れわれが学校に合わせて授業を受けているような気が
する。韓国では大学生は自分で授業を選ぶ権利がある
と考えられているが・・・。

○地域にいろんな事情があるとは思いますが、体験
プログラムでは小・中・高校別に訪問体験したが、ど
れも似たようなものであった。プログラムの都合に向
き合わされたようで物足りなさを感じた。

○授業では教師たちは一所懸命に教えているのに、運
動部の学生たちは受講態度が散漫であり、みんな寝て
いたりするので一緒に勉強するのが嫌だった。

○ここでは、なんとなく自分たちがお荷物のように捉
えられているようでいつも申し訳ない気がしていた。

○この授業は私たちが日本語を勉強するためのもの

ではなく、日本語が上手な人でなければ理解できないような授業が多かった。また、日本語をまったく使用しないような日もあったので、私たちの語学研修にあったプログラムに変えて欲しいと思う。反面、この地域の人は、他の地域に比べて日本人が韓国や韓国語に関心を持つ人が一番多かった。（主に高校訪問で・・・）
 ○この大学の大きな問題点は授業科目にあると思う。自分たちの受けたい授業が受けられないことは問題ではないか。私たちは日本語をもっと勉強したいと思って日本に来た。前の大学では私たちのこのような考え方に対応してくれて日本語の授業が中心的で多くあった。ところが、ここではあまり興味の無い建築・芸術・健康とスポーツなどが中心で、この大学生の授業科目を私たちに受けさせたために日本語を勉強しようとする私たちにとっては、日本語からもっと遠ざける距離感を抱かせるような結果となった。

○授業で感想文を提出させるような方式は良くない。なぜなら、学習で得られたものや思い出の体験が変質させられる恐れがあるから。それは、今日何を勉強したかということよりも、感想文をどう書くべきかということに毎日悩むようになるからだ。

○多くの体験学習があったのは良かった。また、他の大学に比べてこの正規の授業に出られたのも良い経験であった。学外研修では日本文化を知る良い機会になった。多くの役立つプログラムを準備してくれて有難かったが、しかし、その中の幾つかは残念ながら自分にとってまったく役立つものとは言えず、むしろストレスを感じるものであった。

④第2陣研修生の「自由アンケート」のうちから特別率直な意見が集約されていると思われるものを2つ直訳して下に記す。

（女性Tさん）

これまで研修をしてきたほかの大学と比較するのは良くないと思いますが、私が感じたところを率直に申し上げてみたいと思います。はじめの島根の大学では

パートナーを決めてくれて毎日の会話時間にそのパートナーと日本語で話し、発表もしました。日本語文法の時間も度々あり勉強になりました。宮崎の大学では演劇や弁論大会のようなことをしました。また、パートナーとアンケート用紙に設問をつくったりビデオを撮るなどして一緒に活動する授業が主だった。萩の大学では、第1陣から聞いたところでは授業はそれほど多くなく、体育授業が多いということなので少し期待していましたが、体育技術よりも「スポーツ文化論」や「建築概論」のような科目であり、自分たちとは関係の無い授業が多かった。もちろん、常識として知っていれば何かの役には立つとは思いますが、語学の研修に来てそのような授業を受けながら毎日レポートを書くことがどうしても理解できませんでした。授業が私たちを中心におこなうことは不可能かもしれませんが、私たちが必要とする授業を望みます。夜になると、危ないからということでせっかく自転車に乗れる機会も失ってしまい、毎夜学生寮でインターネットばかりをして過ごしました。自転車にライトを付けられないのでしょうか。それから、ホームステイについて率直な感想を申し上げます。それは、韓国から流れ着いてきたゴミの話をされたので、私たち二人は恥ずかしい気持ちになりました。また私の嫌いな食べ物をまえてアンケートに記入したのですが、その食べ物を指して、「これはあなたが嫌いな食べ物ですね、しかし、私はこれが好きなのです。」と言われたので私はとても恥ずかしい思いをしました。そして、体重のことが話題となったので、びっくりしました。「行きたいところがありますか？」と聞かれたので、私が行きたいところを言うや否や、「遠いから面倒だね」と言われたりしました。これまでのホームステイとはあまりにも違っていたので、私の日本人に対する感じも少し変わりました。次回の研修生にはこんな思いをさせないよう望みます。

（女性Kさん）

山口福祉文化大学の授業は蔚山大学校の授業とスタ

イルがまったく異なっていた。体験することは良いと思うが、授業の内容には正直に興味をもてなかった。また、日本の学生さえも本気で授業を受けているようには思えなかった。私たちがなぜこのような授業を受けなくてはならないのか疑問である。他の大学では日本人のパートナーを付けてくれて、対話ができる時間もそれなりに準備してくれていたのに比べると不満である。日本にいれば意思の疎通は日本語で行われるので自然に大きな川ができるくらいに思われるかも知れないが、肝心のパートナーとのプログラムが設定されていないこの大学では人も少なく売店も無く、一日中日本語を一言もしゃべらない日が何日もあったくらいだ。一週間に一度のゼミの時間にはパートナーが付けられていたが、一週間に1回だけであり、それも会話をしている時間ではなくてゼミの授業なので、授業中にたまたま雑談を言い合う程度で1週間ぶりに顔を合わせてもお互いが照れくさい感じになり会話にまで発展しなかった。対話がなく一方的に聞くばかりの授業であれば韓国にいても十分同じだと思う。できれば、学生どうしが話し合える機会を設けて欲しいと思う。

それから、何故か私たち研修生はこちらの大学にずいぶん迷惑を掛けているという感覚にとらわれた。もちろん、迷惑を掛けていることには違いないと思うけれども、そんなことにあれこれ気を使っていると日本語が素直に出てこないような気がする。

(第1陣研修生の学外研修)



小学校で交流会。給食後の運動場で



萩八景遊覧船に乗船



中学生たちと交流会



萩焼きづくりの体験

⑤研修生が述べた意見や感想文を項目別に簡潔に示すと下の表のようになる。この表から全体の傾向が読み取れることと、研修プログラムの課題も見えてくる。

項目	日本語による語学発表会や学外研修レポートで述べられた傾向		韓国語による自由レポートで述べられた傾向
	(肯定的感想)	(否定的感想)	(率直な意見や感想)
萩の町の様子	静かで落ち着く	人が少ない	特になし
萩の自然景観	美しい		〃
日本人の印象	親切・やさしい		〃
本学の印象	環境が良い・清潔	学生が少ない	学内には人が少ないので、一日中で一度も日本語を話す機会が無い日があった。
学内研修		設定目的が不適合	日本語の授業が少ないこと。専門用語が多く難しい。日本の学生さえも興味が持てないような授業を受けさせられるのは疑問。
学外研修	多様で楽しい		様々な体験ができて良かったが、毎日レポートに追われて気が休まらなかった。
日本語授業		期待はずれ	日本語を練習するために来て、日本語講座が少ないのは疑問に思う。
授業科目		想定外	興味の無い授業が多く、内容も難しい。
宿題レポート		毎日多く煩雑	難しい授業の上に毎日レポートや宿題、そして学外研修でも感想文を書かされたのは不満。
教職員の対応	一所懸命対応		とても親切。熱心に世話をしていただき有難かった。
チューター制		無いに等しい	週に一度では不十分。日本人学生と話す機会が無い。
本学の学生		授業に不熱心	授業中に寝る学生が多かった。
宿舎(学生寮)	大変良い		建物は大変良い。
食事	美味しい		別になし。
移動手段	自転車が良い		暑い日に自転車での移動は嫌だった。
小中学校訪問	礼儀正しい		子供に規則正しい教育がされている。給食は衛生・マナー・感謝の心等全ての点で教育的効果が大きい。
出前講座	興味を感じた		特になし
ホームステイ	貴重な体験		大変お世話になり感謝している。貴重で思い出深い。
印象深い事柄	自転車乗りと学外体験		学外では多様な体験をした。特にホームステイでは心から遇っていただき、貴重な思い出ができた。
研修プログラムの全体評価		日本語を話す機会が少ない	自分たちの受けたい授業が受けられなかった。語学研修に合ったプログラムに変えてほしい。

6. 課題及び提言

前項の表から蔚山大学校の研修生 28 名の意見や感想文の傾向をみると、日本語による語学発表会や学外研修レポートではどちらかというと肯定的な意見が多く、無記名の韓国語による自由レポートでは否定的な意見が多かった。ただし、肯定的意見とはいっても本学関係者に向けた儀礼的な面が多分にあるので、それらの意見がすべて研修生の本心とは言い切れない。むしろ、否定的意見の多い自由レポートにこそ彼らの本心が込められているのではないと思われる。

そこで、この表の中に研修プログラムの課題となるものが見られるので、次にそれらを「学内研修」、「学外研修」、「その他」の課題に分けて挙げることにし、今後のプログラムの改良点について提言を試みたい。

①「学内研修」におけるプログラムの課題と提言

「学内研修」では、日本語の授業が少ないということが研修生の間から指摘された一番の課題であった。そして、専門用語が多い受講科目については、彼らの日本語能力では専門用語が解せず授業が難し過ぎるという声が伝わってきた。彼らの意見では、専門用語が多い授業は日本語レベルが完璧な人の授業であって、日本語を勉強中の自分たちには不都合だということである。したがって、このような専門科目を授業に取り入れたこと自体も課題となったのである。しかしながら、授業科目の選定は本学の都合によるものではあるが、蔚山大には事前に連絡をとって了解済みであった。だが、このことは研修生には知らされておらず、彼らはこちらに来て初めて自分たちの受講科目を知り、また、科目は選択の余地が無かったことから、結果的に「本人が受けたくも無い授業を大学の都合で受けさせられた」と思うような人までいた。

そこで、「学内研修」においては、まず彼らが日本語を勉強中の立場であるという点を考慮し、受講科目は原則として一般教養科目にして難しい専門用語を無くすこと、そしてある程度は科目を選択できるようにす

ることを提言したい。なお、研修生からの要望が多い日本語の授業については、本学の現状では限界があると思われるので学外の専門家に業務委託することを提言したい。

続く課題としては、日本人学生と交流する機会が学内では少なかったことが問題になったことである。研修生たちは島根県立大や宮崎公立大における日本人学生のチューター制度と本学でのチューターとを比較し、本学のチューター制度に不満を感じる人が多かった。本学では毎週 1 回、1 時限のみではあるが研修生一名に日本人学生一人をチューターとして付けていた。ところが、研修生たちは、1 週間に 1 回の基礎ゼミの授業だけでは授業中わずかの間に顔を合わせても、お互いに照れくさい感情もあって会話はまったく進まなかったという。こうしたチューターのあり方では制度として機能していないことが課題となった。

そこで、現状では学内でチューターに向くような人材や時間を確保するには限界もあるので、学外からボランティアチューターを募集することを提言したい。その場合、研修生だけを対象にする逐次的募集方法ではなく、交換留学生や一般留学生らも対象にするもので大学と萩市民とを結ぶ架橋の役割をする NPO のような任意集団を一度立ち上げて、そこにチューターとして個人が登録をしていただく方法なのである。こうすることで、本学のいろんな行事にいつでも対応できるようになる。ただし、チューターは責任の薄い無報酬のボランティアではなく、チューターとしての一定の成果を課すことができるように、小額でも良いとは思いますが報酬は必要となろう。

②「学外研修」におけるプログラムの課題と提言

「学外研修」では、行政をはじめ奉仕団体や一般市民など多くの人々に協力していただいたお陰で多様なプログラムが準備でき、研修生たちからもさまざまな貴重な体験ができたという面で概ね良い評価をして感謝のことばを述べていた。ただし、「学外研修」の中で

も小・中・高等学校への訪問について否定的意見を述べる者も少数いた。それは、彼らにとって小・中・高は学校が違っていても学校訪問それ自体は似たものなので、3回も同じような訪問をさせられたと感じたのである。学校訪問はどこか1校だけで良いのではないかと、3校も訪問するのは時間の無駄ではないかと感じる研修生がいたことは一つの課題になる。それから、「学外研修」では毎日レポートを書かせることに不平を言う学生が多かった。しかし、これは日本語の練習という意味で本学の意図もあったのであるが、彼らにしてみれば、せつかくの「学外研修」の場であるにもかかわらず、現場で大切な説明を聞く時でも、その内容を理解することよりも、その日のレポートをどう書くかに気持ちが移ってしまい、いつの間にか大切な時間を消失することも多く心に余裕が持てなかったと告白する学生が何人もいたことは、やはり課題の一つとして考えておきたい。

そこで、学校訪問に関する提言としては、小・中・高に行く日をなるべく同一日に設定し、研修生には選択的で1ヶ所だけを選んで行けるようにしてはどうか。そして、レポートは、毎日書かせるのではなく、「学外研修」の最後に「学外研修レポート」を義務付けて、レポート作成のための時間を与え、テーマを一つか二つ選んで日本語でしっかり書いてもらう方法を採るよう提言したい。

③「その他」におけるプログラムの課題と提言

今回の語学研修プログラムではホームステイや出前講座などに研修生たちが興味を示した。特にホームステイでは、日本に始めて来た研修生たちにとって日本人家庭での宿泊は大変刺激的であった。学生には食事の好き嫌いやペットの好みなどをあらかじめ聞いてから、受入れ家族に伝える方法を採っていたので、大学3年生にそこまでする必要があったかどうかは疑問ではあるが、双方が対応しやすかったのは事実である。実際にホームステイにおけるトラブルや特別な問題は

生じなかった。なお、学生たちにはホームステイ上の生活ルールを明確にさせるための事前教育をした。例えば、ホームステイでは家族の一員としてそれぞれの家族のルールに従い、特別扱いほしくない。自分の洗濯物は学生寮に持ち帰って洗う。金銭貸借の禁止・特別なプレゼント(楽器やスポーツ用品等)は買ってもらわない、ことなどである。これらは、ホストファミリーに金銭的な負担感を与えないよう配慮するものだった。意外だったのは、受入れ家族では萩周辺の観光ばかりか、遠く福岡や広島にまで学生を連れて行ってやり楽しい時間を過ごさせた例が幾らか見られたことである。

ホームステイ受入れ家族に後でアンケートした回答では、「日本語が正確でしっかり勉強している」、「礼儀正しいのには感心した」などのように、ほとんどの人が学生を高く評価していた。また、受入れファミリーにとっても韓国の大学生と直接に交流する機会が持てたことについて、「良かった」、「今後も受入れしたい」などと、ホームステイを肯定的に捉えている人が多かった。このような評価は、学生たちの態度やマナーが全体的に良かったからでもあるが、ホームステイの期間が1泊2日と短かったせいもあると思われる。

ホームステイは異文化を体験できる最もふさわしい機会の一つであろう。今回は、学生も受入れ家族も双方が非日常的な体験ができたこと、そして国際的な文化交流の観点からも韓国の若い学生に萩の文化を知ってもらう良い機会であった。こうしたことに本学が積極的に関わっていることについては、萩市民も肯定的に評価していただけるのではないだろうか。

ホームステイに関しては、今後も特にこれといった課題は無いのかもしれないが、敢えて言えば、ホームステイの受入れ家族募集に関しては相当に手間がかかる点が課題であると言えなくもない。今回は合計5回、28名のホストファミリーを確保することができたが、これも萩市や民間団体にお世話をいただいたお陰である。しかし、今後も今回同様にお世話していただけるという確信は持てないし、やはり募集段階における労

力はかなり必要になると考えておかななくてはならない。

そこで、この課題のために、上に述べたボランティアチューターの募集と同じ方式を採用することを提言したい。すなわち、逐次的な募集方法に頼るのではなく、学外の NPO のような民間団体を通じてボランティアチューターを募集する際に、その中にあらかじめ留学生に関するニーズとして留学生のホームステイ受入れについても登録していただくという方法である。この仕組み作りができれば、交換留学生や一般留学生からも対象にすることができ、大学と萩市民とを結ぶ架橋的役割を担う非営利団体が誕生することになる。そうすることによって、萩市民と大学との距離感は一段と縮まり萩市民からの協力も現在より得やすくなるであろう。そして、一定の費用が発生するとしても、留学生に関する業務をすべて一任できるような体制ができ上がれば本学にとってもメリットは大きい。

なお、学生に人気があった出前講座については、科目を吟味する必要はあろうが学生が非常に喜んでいたので次回からは今回の2倍程度に増やすことを提言したい。

その他、今回特別に話題になったものとして、学生の移動手段として自転車を一人1台あてがったことについてである。自転車には初めて乗るといった学生もいたが、そのような学生も含めて全員から大変喜ばれた。強いて言えば、雨の日や逆に強烈な暑い日差しにさらされるようなときには、別の交通手段を考えてほしいという声もあった。また、自転車に電灯を取り付けて夜間にも乗れるようにしてほしいとの要望が多かった。

7. おわりに

本学は今年(2010年)1月に蔚山大学校と学術交流協定を結び、5月7日からの語学研修生受入れによって両大学の交流が本格始動することになった。本学にきた語学研修生は蔚山大の人文学部日本語日本学科3年生38名で、本学には2陣に分かれて述べ約3ヶ月間滞

在し、学内・学外研修プログラムの全日程を終えて7月23日無事帰国した。研修生たちは全般的に優秀な学生が多く、日本語においても中には小学生の時から日本語に親しんでいたという学生もおり、日本語能力は半数以上が高いレベルであった。しかし、後で知ったのではあるが、3年生に編入してきてから初めて日本語の勉強を始めた学生もおり、実際には初級程度の日本語能力しか持ち合わせていない学生が全体のおよそ三分の一はいたのではないだろうか。彼らは日本滞在中にできるだけ多くの日本語を学ぶことを期待していたようであるが、実は、本学では研修生のそのような事情を認識できないまま準備を進め、日本語関連授業についても深くは考えていなかった。このことは、カリキュラムの組み合わせに対する本学の都合にも因るが、もともと、蔚山大と事前協議をした際に、学生たちは2年間も日本語を学んでおり日本語能力は上級レベルなので日本語による授業は支障ない、との説明を蔚山大から聞いており、そのような認識を基に本学では研修生受入れの準備をしたのであった。

その結果、研修生たちからは、日本に語学研修に来たのに日本語の授業は無いに等しく、授業科目は自分たちで選ぶことはできないで大学側の都合で決められた科目しかなく、関心の無い科目でもしかたなく受講した、というような批判的意見を聞くことになってしまった。このことは、本学の教職員に対するアンケートにも、研修生の授業態度に関しては「研修の終了近くでは講義を熱心に聞く学生は半数以下になっていた」、研修生の受講科目に関しては「本学の教育内容で語学研修生を受入れることは難しいように感じた」、体育実技に関しては「日本人学生との技能の差が大きかった。高校までに習った運動種目について事前に教えてほしかった」などの意見が寄せられ、本学の研修プログラムの実態が研修生の実状に沿うものでなかったということが明らかになった。そのような観点から、教職員のアンケートの中には、「受入れは1ヶ月程度が限度ではないか、受入れグループは1組とすべきである。

授業の流れを2度にわたって説明するのは日本人学生にとって無駄な時間となる」、「蔚山大の目的は語学研修であり、それなりのプログラムを組む必要がある」との意見もあった。

今回の韓国からの研修生受入れについては、3月中旬から準備に取り掛かり、研修プログラムの作成段階から萩市企画課に多くの協力をいただいた。そして、萩市報その他のマスコミの報道等によって本学の国際交流事業が広く萩市民に浸透し、市内の小中学校や高校、民間団体、そして個人などによって学外研修や出前講座、ホームステイの受入れなど、韓国の大学生と市民レベルで交流する機会ともなった。

市民レベルの国際交流であっても、そこに参加するのは関係者のみで限られた交流に過ぎない場合が多い。しかし、今回の事業では、本学と蔚山大学校との学術交流協定事業の一環ではあったが当事者ではない萩市民がいろんな形で参加できたことは、望ましい形での市民参加型の国際交流になったのではないかと思う。その理由の一つは、蔚山広域市と萩市の両市が古くからの姉妹都市関係にあったことが挙げられると思う。一民間大学間の行事であるにもかかわらず、行政や萩市民から多くの協力が得られたのは幸いであった。

一方、研修生たちは蔚山大学校で日本語を学んでいる3年生ではあるが、実は日本に始めて来た学生がほとんどであった。第1陣と第2陣とでは日本語のこなし方や外見上の振る舞いに多少違いがあったが、学生の多くは直接身近に接する日本人に対してほとんど緊張していたのも事実である。その理由は、一つは、日本語によるコミュニケーションにまだ馴れていなかったことと、そしてもう一つは、彼らが学んだ日韓関係の歴史教育の影響があるのではないかと考える。というのも、研修期間の終わり頃に「最初は日本人がどのように考えているのか不安で、接し方に戸惑った」とこちらに来てからの心の変化を何人かが一緒になって明かしてくれたことがあったからである。

このように、「日本人」に対する緊張する思いは、若

い韓国人の心の中に今も日本人を恐れている心境が隠れていることの流れではないかと思われる。ところが、実際にはこのような若者が日本に来て日本人と接するうちに、思いもよらず日本人の親切心や気配りに出会ってみると初めは驚愕し、信じられずに韓国人の頭は混乱してしまう。その後、日本人を見直すようになり心から感動するという得がたい経験をする場合が多いのである。

本学の教職員たちにもこれまで中国や韓国からの留学生を通じてこのような彼らの心情に触れることが何度かあったように思われるのだが、私たちは何となくそれらを見逃してしまっていたような気がする。今回の語学研修生は、日本に興味を持っている韓国の若い学生である。彼らは日本語だけではなく、日韓の歴史についてもそれなりに多くを学んでいるに違いない。少なくとも他の学部の学生に比べると日本についてはより多くの知識を持っているはずである。このような彼らの言動の中に、私たちには気付かないこちら日本側の姿も見える場合があるのではないかということも考えたい。

本稿では今回の語学研修プログラムの実施内容について、主には研修生の意見を視野に入れながら、教職員の意見やアンケート、本学学生のアンケート、そしてホームステイ受入れ家族へのアンケートの回答などを参考にした。

その中で、第一陣・第二陣の講義を担当した教員の意見として、講義の受講態度が良かったと評価されているものに、出席の返事をするときに手を挙げて声でハイということや、講義の後始末として黒板を消してくれた(日本人学生はしない)ことなどを挙げている。そして、日本語の理解度については、漢字仮名文字の文章表現力がかなりあるが、カタカナ外国語の日本語が理解しにくいこと、例えばハード対策などといった意見が目立った。また、講義内容の理解度では、レポートでは日本語の文章表現力があり、講義の専門用語を調べる意欲があり質問等による積極性がみられたこ

と、また、日本文化に対する探究心にも意欲を感じたことなどが述べられている。多くの研修生たちが望んでいた日本人学生との交流ができていなかったことについては、日本人学生の側に気後れがあったことが原因ではないかと指摘された。このことは、一般留学生と日本人学生との交流についても課題解決の糸口になるものであろう。

そして、これらの意見を参考にした本稿の提言として、まず優先的に解決しておきたい課題は日本語教育と学生チューター制度を充実させることであることを明確にした。研修生のアンケートにもこの二つの問題を指摘する声が多かったからである。

そこで、日本語の授業については、本学の現状では限界があると思われるので学外の専門家に業務委託することを提言し、ボランティアチューターも学外から募集することを提言した。このボランティアチューターは、研修生だけを対象にするのではなく、交換留学生や一般留学生らも対象にして大学と萩市民とを結ぶ架橋の役割をする NPO のような任意集団に任せて、そこにチューターとして個人が登録をしていただくという方法である。

なお、チューター制度の充実に関連して、本学学生のアンケートの中には自分がチューターとしての役割を十分に果たせなかったことに対して自責の念を述べている人や、学内でせっかく韓国人研修生と交流できる機会があったのにそのチャンスを逃した、と残念がる人も何人かいたが、このことから察せられるのは、チューター制度の充実と共に韓国人研修生も日本人学生たちもお互いに交流の場を望んでいるという点である。交流会は日本語で行えば良いので言葉の問題はそれほど問題ではあるまい。むしろ日本語で交流する方が研修生にとっては勉強になる。問題はお互いの交流のために共有できる時間が与えられるかどうかにかかっているのではないか。お互いがバラバラの時間帯で学生たちに主体的に行動するように期待してもそこまで積極的に行動する日本人学生は現状では少ないと

思われるからだ。教職員のアンケートの中に「学内で両大学生の関係を深め、友達になれるような活動を計画し提供してあげられるといい」、「本学学生をも引き付けられるような、勉強にもなる楽しい行事(両国の伝統ゲームや手細工を教え合う等)を学生と一緒に考えて計画すること」といった意見もあった。

ホームステイに関しては、受入れ先を募集する問題についてはやはり学外 NPO のような民間団体を通じての募集を提案した。これはボランティアチューターの募集と同時に言い得るので、あらかじめ留学生に関するニーズの一つとしてホームステイの受入れについて登録していただくという方法を探ろうとするものである。ただ、もっと長くホームステイを続けたら良いのではないか。実際にホームステイを受入れた家族の中には1泊2日では短すぎると感じる人がいたからである。そこで、ホームステイを1週間くらいに延ばし、その間はホームステイ先から通学できるようにすることを考えられる。事実、ホームステイ受入れ先のアンケート調査でも期間が短すぎるという意見が複数あった。ホームステイの目的を充実させようとするなら、わずか1日ではホストであるファミリーも学生自身も本来の姿を知ってもらう機会としては短すぎるし、その結果、ややもすればお互いが建前だけの交流に終わってしまうとも限らないからである。

(研修プログラムの1コマ)



開講式後、キャンパスで記念写真



萩城下町の探索



萩市長を表敬訪問



茶道体験



焼肉交流会で餅つき



日本語で研修発表



出前講義

参考文献・参考資料

- 1) 李元馥；コミック韓国，朝日出版社，2002
- 2) 蔚山大学校人文学部日本語・日本語学科3年生第一陣、第二陣研修生の「語学発表会」音声記録(日本語)
- 3) 〃 「学外研修レポート」(日本語)
- 4) 〃 「自由レポート」(韓国語)
- 5) 本学の学生・教職員・ホームステイ受け入れ先へのアンケート調査